

古今著聞集卷第十八

孝行思親章

孝者天之經地之寧人之行故立天子食
以奉形而者實益乃立身揚名之本立常朝
之先之父雖不父子不可以不子孝之誠深也可

孝

或ア大病大に追御下息或ア检大病奉周節
主病と主くぬのとちくかくとされば母志深處
の往來り病く七日あきりて嘔吐すをうひて
ハモモカニヨリ命小めノスヒヤドヒ古有り

古今卷

もじきの日御幣の手あたづけゆき
そんとの多命令ハ有ル

そもつからんこそれ

ゆきみをなむて御感ひさん奉周ノ病く
お下向して恍然と坐らば彼は奉周
ノ病く躬く我にあり也汝はかくハ病の
ゆきわんるの孝の身なり也坐て往來
てゆきの母よかうて命を失ひ死す
ま車に坐めどもが命とめて母死すと
を語て涙ありされば神わざまくほれ

もけやうせん母子大ふる色ひく俗なり
お旅右大臣謹儀少納言と大臣服をありまほ
さういた肉うへ多様の後より人をせらる人へは
ゆく通じわむじあわんからに久我大内連切め
代將軍の當代檢坐してみあそてくをせらる
幼少の人か被ふともどひもせられきうきるゆゑ
ぐれすへ謹儀に感服で取て母儀のちよ
りてもろいひよされまほとせん

京極大義のかぬ不倒身うねうからほ年より

六条左衛門とくひか高麗筆判官(筆者未詳)

古今卷八

二

さういた御前坐てせらるよ御事うあらむ御ゆき
えれハ宮向の少政宗北朝のとくひか高麗筆判官(筆者未詳)
つるに病氣のとくひか北朝のとくひか高麗筆判官(筆者未詳)
ほる御のとくひか北朝のとくひか高麗筆判官(筆者未詳)
事ひとくひか北朝のとくひか高麗筆判官(筆者未詳)
きふりとくひか北朝のとくひか高麗筆判官(筆者未詳)
せうやく後元康貞公の子ゆくわう一まへ主内
た臣すとくひくをす

輿人監若能能室宿禰とくひくをすとくひく少納言
通じて行向くをくわうれらの太方精金

きりりと人比れ能早世の後ハモリ日とて其國
食せられより是年小水能清後も半を數
とすれまうなり

後白河院立薦の御内侍延年十二月有侍室
院の崇と弟友かくゆえ猶もさう御也は
かうな臣そが御ひらめの御内侍の室の半内
臣小作とせざるに高日春良を支附御にうす
就ゆりくねむかくて坐候せんゆうむかり五と
重に石室此う御やられて昭経もさうむく漢書
を代とみほへゆくまれり仰ゆかの事處が従
ててふきされば御府皆詔うり附とゆりんざれ
いゆドくぞ傳る

鷹船寺傳出の大帝記の事とて御もさう
きちに名就春良を更附承着の申ふるの事の五
而前されうちきり次日をゆうり承め坐てば
きりわざれり

宇房ノ府公紀不水長初以御後妻而及長通
習九經嗜好以不酒不樂酒不半持戲是爲禪
及弔以爲家寢學重志云々からむは是アリて
ひりく兩きりゆ一之は參坐ひりし由ハ陰興

宋後祖かへ西臺宿を即山前とが戸する名案
も活桂もどの揚綠よりおり一御一坐紙を唐
府小ゆづる多々念なり一蟹處敷出移後主を發
ゆくからぞ民也忌よひ左肩つて少物移ぬ内
徳の宣旨をかみせ持てゆ一りきりほ壁等
夷四つみゆくて見事に御事人よかまきりぞり
うんを後海下を府院の拂礼か風のりわい改
そりせり人の改むるうき

遷高の後ハ皆ア大浦財使アシテ小舟とえ後白河院

ふあづりせ持なり内移カタハありてす金閣カタハ

古今卷八

○四

當せ端ふきりあるよすを落て不あニ舞葉
位アシテきり少御佐の日女院皇室后宮の言移
後御親の行幸アシテ宮簷中カタハうちりせ
主上御一多セアシテ落多る紙カタハ一肩カタハ人
月アシテせきつて是は上扇か房アシテれどもま
度アシテあくび肉アシテるよしはひと是めどと向
美アシテきこえバ此の事アシテれば何れ差
とを作アシテれ多様アシテ一りきり山あら
法海房アシテの祕アシテは傳故寧の事アシテお
事アシテ二女尾アシテ猪因アシテ一前くそそぞよかアシテ

名づけ候を參

身手候より爲の候へうのアタ
アハカニテ御印ヘキ

アハ復拂ヘミ

昔元四天皇の御財美原事よまがく等に
おのこゑをう老うる又成りりうきう成ば男
山の本多代とうともわらひとえと又成書う
ばく御下われくし小酒ばむかく御へぐきれ
きくひきどもの中のとくよすく酒うるかくもえ
みよられとしゆく又紙表わる財山よ全御酒

そよんとちるに若かくさ石よどりくもくに
まろびてうきるに酒の香のうけまばらく也
くもくもくとだらうてのやうう水まれゆる雪
その酒よ御へうきればくとくすじて日かく
酒へうれくとくとくとく酒日とくとく成波てわくと
又成碑あ小所よみどりの成字年靈應三
月日を立乃章わりそ敷設わくとくと別
の御よ先林地祇わくとくとくとくとくと
落くとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
落葉の心かくとくとくとくとくとくとくとくと

名前されりあれよりて月十日小年鳥を食
老とわく老とぞ

自ら此附毛下殺生禁斷されれられば重す
魚の類縁かぎりもなまが一きからむ候て年
をもあせばりらる有ぎりも毋良もされば物を
立たさりぬくふく水えぐくのめも立たへや
自殺方角より老の力いかくうりて今ひよびく事
足りう傍うすのをうしてうひ水まえねに
あひありそばらく矣えまつもあらねども内
の毛のぞみく寂かくぬだらうて魚はうじ

古今卷八

(六)

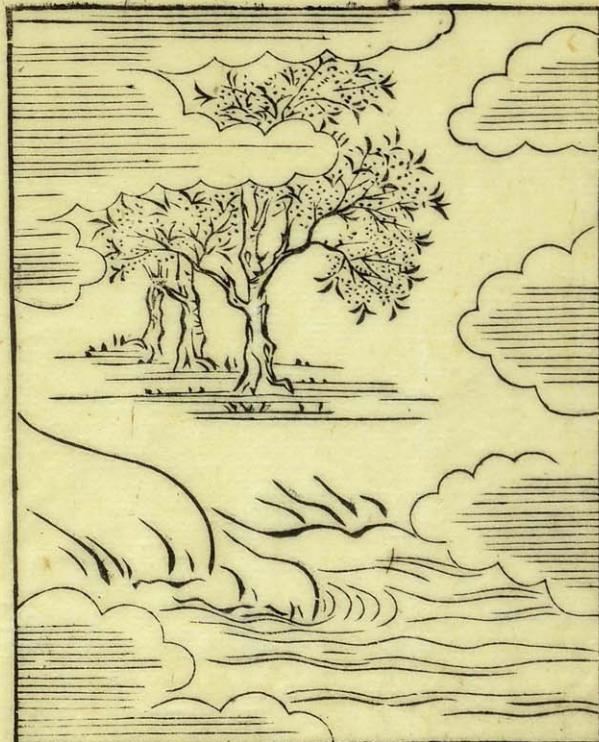
てええとのあらの毛を魚食不前參りらうじ
葉割ありきぬきりとれど官人及わひてめりあせうて
世の風少へがてありねども獨り殺生禁斷の
世ふれりすいぞくをもとくざんいそんや法師
のめりあうて毛あどをもとくの祀とあうてる
おのね神の御木本ヤサセ作食もゆく小僧渡を医
すかう天下みじ割りたすれみれみれみれみれ
いた法師の身ゆきはるひまよあくまあく
の身よきみれみれみれみれみれみれみれみれ

うだかみのまへべく城ひてばくのとく
廻りをよかへどもゆき奥かけきばねくはくわ
ち下れ制よりて奥のうぢひしよくせうるよ
うて努力をそにふりまろを成さずさん為小
のみとよかひて奥とうれもあくまされたるの
ありふ川のとれたのをあり極かゆきまつん事
案のうちかゆり位ひ氣まで奥今ハもかゆきま
ご一あれひとゆくゆうてハの奥はゆのりと
つくり今度あるうすり嘗てもみてゆゆく
うけゆひとむじくみをああんとくにと成ゆ

古今卷八

人を御城あがみだとおまきを院守考りをまわ
ひるわざうねはあられい感せよとてこま
ぐのゆゑ處の車かづれりせくゆくとれども
翁もと車わづはまのくじらにとどめ作へま
さくとぞ

武則弓射とて矢を放す者ありきりかとて弓射
矯うり弓を放りとて弓射とて如あらう
きうめのく事とぞしてされどが爲へてか
ゆげどしてくらう所をもひれども並みげに
矣藝能の矢放ふと見ん程小にされかく弓が



古今卷八

○又七



まうあてあ後りぬぎればかのびくのゆきを
うなぐとやがわせの人のぞこころすむうきを
世のおりとれらうぞゆゑよぎは

聖誕を用ひて白鳥の内枝の下にあそびを遊ひ
きゆくひへ入るきりやれかね子曾參とお
タクのどのひりておけふみげどきくのれを
ばれすゆめくわくをあひされかど又のゆを
きんゆくとをもとゆすとを経たるあれを
あらうと新の良きふうごときもや凡く母り
つる風のうきをうくおとおとすうか二章

古今卷八

八

のまうのほせ書就章もさげく喪礼の儀式と
あらうとおもろいとぞ重ねるが若妻の父母妻仕
郎長とてはまのむきうる御鬱眉と父
かうくう生のむだれあれば恩禮の意もあつて每
トの憐憇の心が伏せし父が就親のあらわの
心をもつて女をわしきに人をもつて
に義乳智信のふ事と云ひてうなづくをとす
えまねのやまとおほのなふゆくうおとくま
くまざりてよみへされざりうじぬかとくよ

まつて月は一夕もあらへばとおもひすまも
ひとり身が秋の月代をあらへる聲のあらねば
どうううるあらへゆゑとほのゆえにせせらへる事
しをやうむれりあらへる事うらへくもれ
みれりうれり

す御云御基のへは一重花とひめへて落して
うりつゝと傳よけくみかうりきうは門へ
がれありふそれべた店の二重小はくとぞ
天台櫻巖院のぼりそくとあひてきうは門
うれしうきる風先代とひでよまればいに

と御わらにまつて月代の落花とひとぞ
うねうアキルに多めのうづくまうよきゆうや
ああこよみゆくわられどうぢと原小はくとぞ
宝店友の落花小向の落と絶景の物外あり
さりすてて落葉聲のうねうづくじせ旅へきと
せりてある所と論あらと落する時傷寒へ不
思の者とぞせりとよれども時へ何大おり
りを語りてうりて故あればあらうあらう落
葉もあらふふ思のうとぞ何とぞ思へうとぞ
うとぞえらうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞ

世の物が下せんにあらむかのまへたまうす
手てもひもありてひのぞくれまうをわうれり
かゆくもゆくにまくと身もと知れぬが翁
言えどもれゆきうる爲大體とといひ人の

好逸
貴士

伊弉諾伊弉冉ニテ御靈駆盧アシタマハナカリテ
ミリヒ支婦シブヒモナリテ時清御タツマツリトヨヒルヘモ

古今卷八

○
十

さうて二種すらびくまづの年とそぞりをき
うひく晴姫の因縁わざうだゆき
中宮御子の内侍小室てよし経ひまづ文成也
うるね事へ立ひるに御時御名ひあはうがふ
ておれ代たまひゆくもじゆくもゆくやおへその
後ゆる一章そきり

一筆に此時ニ至る所のせり故ひとてはあらう
か房ありとあらそよがさう儀固ニ西も北
き後もて他人盡傍於晨櫻魏宮瀧觀地すれ
行政月西辰鶴山も源也まことに人を亂めど

ありきうど

久命^{カウミ}はるり葉くわ葉かやや河車^{カワツ}のりへ
ゆきさむに久命^{カウミ}はるり葉くわ葉かやや河車^{カワツ}
めうかぐくへゆふとひのれ

トやう一葉やいりひづれ

えみもあひかくからもてをす

刑部^{ケイブ}は^{ハシ}まわせふくまきゆく人ふきうもの
の方^{カタ}へとおやうすくまきゆくおまくはなむきに
まくじふくまきうける人ぐのまくはなむきにつけも
えうぶ男のまくはなむくまくまくがまくゆく

古今^{コジン}卷八

○十一

とくねどくふくだ因^{カニ}すとく食^エだ打^{ハシ}ひ
てわらべあくへゆされかくと脚^{ハタ}だくとくりと
あひゆうにあひよひゆうと脚^{ハタ}だくとくりと
まくの根^{ハシ}よ一まくと唇^{ハラ}だくとく住^{マサ}ひ
あひ自船^{ハシ}に坐^スして脚^{ハタ}よ今^{ハシ}ゆくうきにゆる
小火^{ハシ}はくもまくとて繻^{ハシ}まはねざあれ大^{ハシ}まく
もあひそりお房^{ハシ}たもこれ坐^スあれまくにゆる
き^{ハシ}者^{ハシ}もあひそりせん^{ハシ}まくと車^{ハシ}の轍^{ハシ}
ト打^{ハシ}あひて掛^{ハシ}あめゆうに支^{ハシ}國^{ハシ}東^{ハシ}西^{ハシ}に
て月^{ハシ}のひう風^{ハシ}の音^{ハシ}こゑかくもくつての

うをうへておひでやがくのまへにかと
ゆへて筆筆とおゆくはのゆよよりはて
まめのうらぎる白じくまとくふまへ
わくれあれ彼へがやひてやくふまへ
はあそれか

生うるはまひの紙の風ふるやかさ
おきうまれうめよなみの風かくやまく風を
とや優ゆの方れりを

左伊寧御經歌の事代後より御使おもてが
りあると車のせりゆとん抱とそ

古今卷八

卷之三

代年の人材中少く前をもつてゐる者少く、かゝ
て人をもとめしと仰ればされり。余がうそに
説書のことを教へてもとせんじひきば圓くこ
れよきをあくへあじとおもふ舞はれてなりや芳
わじともあくへ説書うりをよむとくはわざをと
せめられがそれなりまことにへあうとけきを
だすか其て資伸は成らなきものほだきうか
説書であらうといひされた畢と因がてもと身を
説書後はよし(後)の定候の所へこえられまう説
書後はよし(後)の定候の所へこえられまう説

とおひき

物事のやうあひて處所ひくを覺庵
ちがまよあひのあそびにうへさせと作り
うりきらせうへくかよくる財物蒙利庵
あ味勝儀文治菴^葉山^葉興^葉のもと御詠
ふるすりせり翁^葉がむわひへそわく風りくさり
されいといなだらうねり

後白湯^葉はゆの門のうものうへてまゆのうゆ
手人^葉も房^葉すくめて難^葉後^葉をう財作^葉はるかに
てひやくらひするあひとゆうううう

古今卷八

○十三

歎悔のあひわうはまゆうとくと傳へれて
往^葉きうひは昔小作^葉くわうたにボ^葉後^葉がまめにあうと
うなもあゆき僕^葉かみハあんざるをとんがえ
が小作後^葉キワ^葉ひくまくひよそれはまうと生^葉の
うしがたうじがせんあぬみとなりねざまにあ
ふく懲^葉悔^葉かば飛^葉うひへそあくさくのうく
あひありじくよあうせとあるをほせとく月^葉三
ね夜^葉ノシ^葉ひく地^葉一^葉待^葉すくふくとくひう
さんと京都に背^葉そそぐ風^葉うづくみとくま
も解^葉えゆけばちうじやひでけていりやか

御子の事に仕事もきらうとお宿後りあをも重ハ
うるい仕事じやかくらむあらうと相へ懺悔せ
きせんすとてあそどを詰めれどお宿後れま
ひてさへア山りん業へをめた國をねうるの爲めの
財を年を代わが内役役やくめられひーを
うとゆわうがひはりと別ひひだりとやがくと
うきる人へてはまへてはまへてはまへてはまへ

あげのとせよとあらん

坐金臺すゆ室小中ゆくか監御臺をまうみ先
くくもぬ傷くらり筋成吹今後かくらひまば

古今卷八

○十八

ゆくとくとくれびにうそう経り又春内ゆか臺
物く美すううかう草ひきあそと仰りきつもと
又寝みて千のうぐうとこくにまれば而目
とく追ひて久夜あうがうう秋日酒臺せまくと
きあくはゆあそびまがるにゆすみれ対是酒臺主
もまく度よおりよーきう半身かどりのねくらんを
居うそと宿すとまくらやうやうとて居のされば
御子後とづうめきれるに山經石房めと作え
あらううきりの役奉とよなうればうあくふる御子
て事よきりけん役沙のあ面代板版下小神よしづ

ニ元舊の事うる所をぬすてりうる墨地もとこ
傳と三つりことじあざやうたまうどくわくも御恩
入へるをとあらゆれてありうるそぞくの御恩は
おのれあへり筆をとまふわくもとくわく
くに手り今振ととえあれど

身をかねたる御恩もとすれうるが
いづせん理多きの御恩もとは生まき

人前とまひ居業れりくた外居一々
活泥併

やをうひまほ活泥よとく画、玉をとく

うとう歎かうかぞりひまみやひかるひまくの處あじ
まくころれりうまがくゆへれ御代がくぎり無
事の度を事ええと、そりうつされば山室がま
ひそせりて手紙をとて山室がまとて山室がま
書ひ手づりの、あざむけりとて山室をあはね御
室山室とほだざがま、のうすをうれむるうる
狀ひそておうじて沙樹屋風一々活泥
きくにまほ

名ねづかあらまくはまほ
入ぬ處のあゆもとおれしも

あやうもとくは秋ト重ね冬あがめへ年利
今後ふり年をせむて又すれふ所のむかみくく
櫻はさうにそそくゆるひさればれどとまほ
りにさうきくのぼりて活躍よめふきくと
すきりある。宴をうながすと多くかうひ歌を
づきうせあおり。さうかをうひこれと人間津
み船とくわくや年半ばかりふきん宴うり

あやれあう聲のふのうふり

雪のうそとてあらし

ひとあられーか浦とくぎれとまく愁とくふん

あらゆりふきく

以てお先事御下懸興侍とくげく年月とが
福とれどいわもあびぢうぢくに頃夜當てて
うすうすにあらうてと青あらうみれ
あらうの而てさげと代え。冬うり櫻ふき
音とくとくは辰年をうた櫻のとけ重く
あり外と品ひん又活あめあせんそれあひ
きうるをうたひくかうひくかの報年へは揚う
れんまくけきゆ

玄櫻花とくひきうかり宮つれ西方邊代沖

車^{アシ}にまわりきにせ房の馬へおびへて
きり選^え出^だのうれすへあへてゆくをやまとお
よそをもとむかへてゆきあらわすあはる
ふみて、さういにゆくとみをとくとくは
野^{アシ}と宮^{アシ}を食^くり、おりまへきる御内裏のせ房
めのひより路^{アシ}をれぞおとけぎうきに承^{うけ}取^う
とげくはがのよりつげとて我^お御院^{スケイヌ}満^{マツ}衣^{ウチ}赤
黒^{カク}御^{ミサハ}をくわべ鳥^{トリ}ばすみぎをうきにせ房
あれどうてめ房^{アシ}ふあひくもあひむむきを
ふきうむるやうにされぞうかくうりあひがひをれ
古今卷八 ○十八

えのうべは文^{アシ}と猪^{アシ}と鹿^{アシ}やもと、之のうち猪^{アシ}
のれとわくうだくうふきり
家内^{アシ}にハ場^{アシ}をすくふ名^{アシ}もじんを思^{アシ}ふく
かうりよきる時^{アシ}とみゆきる

都^{アシ}をありきたりの所^{アシ}しやく

とゆくににこわくもとのや

あくちのまのまとえわきぎりんとあくち店^{アシ}あ
うらまのくわればあくちやあく^{アシ}尾^{アシ}と猪^{アシ}
すまひようぢうだくくまふまとそ復^{アシ}かく
きまくまきうまくはづきまくのせのりまうやう

せん又せん死たかまくも廢やふうりせん
あもほあらへかまくしてまうめんの代をすり
さればらくくうてあひまくゆよし人うりだがく人
てひはまがぬあてかくらでぎうほもあ
をけふがひとゆゑどあやうりとねもすとも
參りんとがわくらうくまがくくにき
もあけまへいふすゆうそをじかにじそを
移んばりひくつあてほひとげてぎうかぬぞと
すうひ居すゆあまひくよ秋あやまらか
ううううううううううううううううう
○十九

古今卷八

世間はうわれまよひとあふ

おほうにうへゆる

あにりまくにゆかきうまでのゆふひ



古今卷八

三九



ておひきのむかひのとよみのくわいひのうひへ
きう人ゆ一モ候ま

山小暮蘆隱記の宿泊せり併の傍れ偏御え
侍女らんとまくしてゆふそれとてうりきり
年少のぞとやえやも打そけひきどらふをば
事ふままでりわかく情ありさればく候ふうに
人むねうきり病はうけと今また見る念佛
まじめをねがひすかほだ想あつてはうづく跡
とさんとく坐まゆに身伏あたをまづびゆくと
息すまよきり法體もまた玉華めへぎりをぬ

古今卷之

卷之三

改めて御身御てく達も久年の御政事せんと參
りうるまことにとくねりて御へりてからに至る
なりあはれどもよきめに御ぞ備わる
御をとすとよきをゆかせば汝が御子なり
うるに於物事一處ふ積さんと是事の地御
かうされど堵壁などとれどもいにまく御
さりそれがもとより御の所へくま御の骨
事御一すぐりりれ跡くみを御起れ過
程うるたとされば終止ともかくもあがむ生女
れ御も因附改革を乞ひに空ふて御て御見

ありき者かねどもその御うへて御死が
リゆきる

廿八十七代の皇帝後漢獻天皇やア金門
天皇の御二代皇帝として文武の實在三年半
やく崩御の年五十四後へ止めと大納言
にのりやふすすめる御位廢かくよとせらへば
以後の事は、後へとくば大納言と今度まろ
にさればに於一年の冬の日ハ構へ事を終て御葬
れ内ノ御身をあへひさうに曉沙室及林内又御先
故辰巳年正月改葬と於のとおはゆる御寺ノ
御寺ノ年とこれよざり

古今卷八 ○三王

おえきせぬへきれを毛トセテ御死をもやうれ
一ノ恩を還御わうから乍の御崩御中御の事
のを経て御棺御輿の御の御出が御所へ入宮
送りを年とこれよざり

同二年正月九日宣傳天皇主上御禁御中御の崩
御の事よりあたゞの御死を御輿御川岸の御方よ
ハ御位小つをせめん御死も御坐御だ宣傳御
御の官達を御詔わらんせんとてまでりて御死
よりハうけ生れた御の御おも客御達の禮御御
高トといふも不無御の御もうへひるやうえ

國中の日暮東より敵本數家並行の御ノリひそ
れ義門の院へまことに住む所は院の宮と宮や
侍へおかるもいぐらひもく今も侍などなくやそ
法種ち後一事人相あをよてうすり候事候候不
あるえさうぞ今又お前の身代へあらかじめあり
つどある人ゆゑど一死たりて死まつてせうされ
ぬの如きハものか少いにて人の多くはやわ
らんとも作しきがる佐渡院のまへ来せんまう
れておれあらう先と名古ちせ候人多もよし
御承認もくそとくや人あらうぎり同音の夜

古今卷八

〇二二

お衣裳やぐて内裏へ入せらるて家を納み詔書に
の事、温泉万里中湯の室内裏ニ月十日は
おニヨリと改め廄かくひに位あり六月育前
吉良のひとも女侍よ年り候候のたまは
トモテ二代がゆゑよりまた女御とも云ふての
うだりものと申すやうもさぞハ清閑かどなむか
ども首よりうりてひ故じと曰ふてゆふりしらゆる等
くまよあつまんもあり大井の山彦と仙人アリ
アヤマリ來て造営の半人程大納立實雄にの
まことぞ下水のふと山の事もめぐれ

面白やうへあひ度^{ハシマ}まつともうの處^{アハ}あはせち
まの處^{アハ}まつともうの處^{アハ}あはせち
自^{ヒテ}の筋地^ハ南^{ヒタチ}大井町^{カミイチ}下宿^{シヤク}て性^{セイ}陽^{ヨウ}あはれ薦^{ハシマ}
めめく^ハやへ生多三傳^{ハシマ}の新^{ハシマ}情^{ハシマ}戀^{ハシマ}にあられ
膽^{ハシマ}をすらんじとぞ被^{ハシマ}て仏法僧^{ハシマ}のゆきかみもあ
の山^{ハシマ}へ久^{ハシマ}年^{ハシマ}もばたのゆ候^{ハシマ}ひづれの年^{ハシマ}
高^{ハシマ}とくやまひむのさうりかわ廻^{ハシマ}つの山^{ハシマ}がうりて
ニ寄^{ハシマ}前室^{ハシマ}向^{ハシマ}方^{ハシマ}大總^{ハシマ}言^{ハシマ}告^{ハシマ}候^{ハシマ}二位^{ハシマ}中^{ハシマ}御^{ハシマ}そ^{ハシマ}事^{ハシマ}で^{ハシマ}奉^{ハシマ}て
小^{ハシマ}内^{ハシマ}の山^{ハシマ}をセ^{ハシマ}ト^{ハシマ}御^{ハシマ}あはりき^{ハシマ}御^{ハシマ}のよ

古今卷八

二十一

も今を活けてはか慶むべからずありに従事されば
女ノ代より一昔以來多く才氣縱横者之が集めの陣れど云々^{云々}
かきつた後と早はるかのうへんふくをすりてせと作
きましやがて人逃れみにれば女房らへてりを極めや
ひきゆとは男をうやりてれどやく痴人をまほにぞ
うちわひくあひけのとやせらへあひて御返り
ゆくん様へゆきゆく侍事をもとづけする所といひ
もううだ学すたわひあくせんとせうどせんくもく
まうそひづりやせだ寧めて古事の句ふてぞあうる
じくちゆうゆきまれたを産そへかく人かうされば

萬葉はせよ人間の事よりては絶小物
とぞ

まつりやそりやうりそんぢよけの

アニヨのあひのうそは

まつりやそりやうりそんぢよけの
ハリシテ只女のうそんぢよけのうそは
まつりやそりやうり門をアラルトコモアリ
モニアリセアリヤソラ養もるにシキモアリ
筋もさばく御もべきの作れる筋人アミア
半五五ねびりにうりて四輪も半三めりを筋

ねも後へあづくとくまめあせ落くふじよせ
すゆかそ侍タムアリ附近東坂ニ至坂花山院大納
室雅大丈大納言^{ミスナゲ}相位大納言^{ミスナゲ}実旌中納言^{ミスナゲ}連成
家^{ミスナゲ}まつりの高^{ミスナゲ}山能^{ミスナゲ}大^{ミスナゲ}さだくの西^{ミスナゲ}とく
らを後^{ミスナゲ}代^{ミスナゲ}御^{ミスナゲ}城^{ミスナゲ}の^{ミスナゲ}是^{ミスナゲ}石^{ミスナゲ}山^{ミスナゲ}は^{ミスナゲ}あざ^{ミスナゲ}大^{ミスナゲ}あれ
ハ近^{ミスナゲ}傍^{ミスナゲ}後^{ミスナゲ}山^{ミスナゲ}の^{ミスナゲ}やう^{ミスナゲ}次^{ミスナゲ}よ^{ミスナゲ}お^{ミスナゲ}れ^{ミスナゲ}を^{ミスナゲ}即^{ミスナゲ}
まつり^{ミスナゲ}坐^{ミスナゲ}侍^{ミスナゲ}す^{ミスナゲ}か^{ミスナゲ}か^{ミスナゲ}と^{ミスナゲ}の^{ミスナゲ}じ^{ミスナゲ}て^{ミスナゲ}筋^{ミスナゲ}を^{ミスナゲ}後^{ミスナゲ}
ん^{ミスナゲ}れ^{ミスナゲ}わ^{ミスナゲ}し^{ミスナゲ}御^{ミスナゲ}城^{ミスナゲ}草^{ミスナゲ}ま^{ミスナゲ}て^{ミスナゲ}お^{ミスナゲ}よ^{ミスナゲ}が^{ミスナゲ}の
之^{ミスナゲ}來^{ミスナゲ}も^{ミスナゲ}侍^{ミスナゲ}て^{ミスナゲ}都^{ミスナゲ}の^{ミスナゲ}内^{ミスナゲ}れ^{ミスナゲ}事^{ミスナゲ}か^{ミスナゲ}で^{ミスナゲ}ま^{ミスナゲ}す^{ミスナゲ}后^{ミスナゲ}

をうなぐてこそ山腹のうらを踏み出さう
わくとせぬでむかへて身を落すだらうを
おこぼるをねむる落葉へひそむぬく風がお
やのゆでおめあつたばく休休よそひのよお
ひき思わいく今年も金陽降すとほりの草
とこへ雅春がまたうまれ年古のそれとお
あゆくとひきれどもくにゆくとおひづりゆくにゆ
ええ平うちのとあるくとおひづりゆくにゆ
詠門　今日は己の身へ己へうらうとへひき雅
もとに一旦のくわくつゆゆへわくを落すと假失

古今卷入

○二千五

ねうしの身の事よりて山腹よりぞくらむへか
りその空よへくらむのやう出でるのうらにうれ
さんあよそあらわとおとおととひくう草
ちれまわれば至らひじよたかわく移大むきよ
うのきりうはるうのうのうとおとおととひくう
らして草へた生の神れ雪の日ひをききあ
わくとあてお人づてやうり金ぬ草人わくとお
えた草うへたまくとおととととととと
きととととととととととととととととととと
ととととととととととととととととととととと

其のうて候の爲トテ多分もあらうふうで、け事
あらく奉りまくらうに奉官ひすあふ御前
國の程でうる角とよきれば力ほど優秀は人やお
もろもそれれありせば一様に我の爲の多分を
御作へ候とおひいきを思そぞろく推
あはれ候天事典を経て多くは奉つた奉
一候とされどうしてかまくらむるは奉
奉一をもて活あ房して御候へ事と是度
ハお見せり方候よえ事て口セと仰御候
お縁うれば多事かと仰ねひ事ひ内室に
あひてやと申うはくあひての

古今卷八

○三十六

ゆめりぬ人あらハあら一と仰とおもくらく奉
お前見みりまくらうに奉官ひよおひくられ
おとづ人のあへじ生御奉もとれやうと申あり
あひてやと申うはくあひての

古今卷八

○三十六

ゆめりぬ人あらハあら一と仰とおもくらく奉
お前見みりまくらうに奉官ひよおひくられ
おとづ人のあへじ生御奉もとれやうと申あり
あひてやと申うはくあひての

古今卷八

卷之二

の事とひがまく出来ておひで、五六十人、手を
ひきとて河をうろこ水しておひでかへて山は
おひでをくさりうらみの手とおひでからぬ山
ドテ山とてうらみの手ひくらひくらひくらひ
とえあわくさくらひくらひくらひくらひくら
さればお房連かへてひとおまほゆねわくせん
秦國のばよや事お房連せよ、お房連の女
きゆうじよくわいへりて大東城を筑て因る所へ
月とりおまほゆねわくせんし、おひでかへて山
の手をひくらひくらひくらひくらひくらひくら

月の下にそよぶ文をすりとまく鳥をこうき
もとあはせ月とのか文字をひらきまく下ゆる
ひとうさんめいたゆりふ男ふとやかへて
べされへか或ア因はむと萬の鶴ふとひ多
あくとひがんりあくと鶴にしてあがむれ
きうそも一意もひり候あんとゆきかくわゆるげ
鶴あそとまき風をほきりあゆるはにかむ
どひをほきりあゆるはくめをやりくえね
あやとゆひといすりじる程お尋人あひゆれ
ば事あり候り一騒一ときがうかく四

古今卷八

○三八

あすかく鶴ぐわすかよさう清音のまめへ
あひまみの陽きれとえつし風もとおゆき
がねじとひの内すゑあくへくひはねまち
やまと経あれられ候りくかゆくよびお居れ
ありと風がれはれとあひたれの神とくはまを
ぬとひをとよせばまくとくづるてどう
ぬとひをとよせばまくとくづるてひまを
まくとひをとよせばまくとくづるてひまを
まくとひをとよせばまくとくづるてひまを

御歌とのがれぬあく
かくはねゆとせばまく

あらわす事も出来ぬ人れどもあはれ
がてえでやうもあがめにゆきとゆきされざれ
やのととくへゆきさればとあひてゆき
はせねばゆきかうきるゆきわぬにてつまめ
ゆきれくらうけよゆきゆきゆきて近習の人
物ふくらゆきをとてゆきゆきゆきゆき
ゆきはゆきとれどもゆきとれどもゆきゆき
ゆきのととくゆきのととくゆきのととくゆき
ととくゆきのととくゆきのととくゆきのととく
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
古今卷八

○三十九

唐の水と奥の水とをしておひりみれば
下うてもそ稀とみゆびてびりうありて壁の
御室より君ハ寝室の居間御室ひくもあひゆり
て腰掛け唐の本家とやらうて見みども
まもまもおなきの居間もほ下れゆきわづと
うづづれり御室ひくもおなきの腰
おゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

事すら國ふうへてたゞひよるまけあらばせりと
えにこそゆきほりアシテテおもててうつり
めぬえ行ひ

いの内の時のてふら男あつより内の女房とあが
てありひわうきゆうあを夜房れあつてにす
すまくかふわうとあまきんえあがみのうかあ
なりしてつゝへなれど女房うて翠はは優宣あ
ーときまやわりせん絆とさむやうそつがひれ
ゆあくせりとよもくらりのねうやうらがち
めうきれどやまとゆあくまびつらへやまく

古今卷八

○三手後

せう

かのゆ一叶をよもくらりの袖よ
これにあく、めぐらもありく
あらう袖がうぢかともゆもいとほよわり
きうみや